

天空の郷地域福祉フェスティバル in 久万高原
第1分科会「縁側発見プロジェクト」議事録

1. 開催場所：久万町民館 2階会議室
2. 開催時間：～午後3時45分
3. テーマ：縁側発見プロジェクト～気持ちのいい居場所を一緒に探しましょう～
4. コーディネーター：

株式会社 森のともだち農園代表取締役 森智子

パネラー：

社会福祉法人久万高原町社会福祉協議会 統括支所長 森田美鈴

社会福祉法人育和会 地域子育て支援センターHappyHouse 保育士 村田由美

くまタウン連盟 連盟長 遊食祭プロジェクトチーム 代表 大原貴明

第1分科会“group 縁側”作業部会長 二宮悟郎

5. 議 事

開会 午後1時30分～

作業部会長二宮悟郎が分科会趣旨を会場に伝え、開会宣言。

「縁側という言葉聞いて、あなたは何を連想しますか？縁側とは、そもそも家の内外をつなぐ空間で、場と場、人と人の“縁”をつなぐ役割を果たす場所として、とても自然に日本人の暮らしのなかに存在していたものでした。でもいつの間にか、わたしたちは縁側の果たす役割を、忘れてしまっていないでしょうか。もう一度、縁側のもつ力を久万高原町の中で発見し、はぐくんでみませんか。」

森コーディネーターの進行により審議開始。

森コーディネーターが、人との関わりが好きで変わった視点での取り組みに関心があることから軽トラ市は興味深いこと、昨今「頑張らない」がとりだたされているが自分は頑張るのが大好きであると話し、「ここでこの時間この集会者は二度とないシチュエーションだ。この出会いを大切に、今、このメンバーで話し合えることを大切にこの会を持ちたい。」と会場に宣言。

パネラーが自己紹介をする。

二宮パネラーが、テーマ選択の経緯を述べる。

・自分達が住んでいる久万高原町の気持ちの良い場所はどこだろうと考え、実行委員から『縁側』ではないだろうかという意見が出た。そして久万高原町の『縁側』はどこだろうと考えてみてはどうかと思いついた。勉強するとかではなく、久万高原町にもこんなに良い所があるんだよと気づいてもらえる機会を作りたいと思った。多方面分野から挙げられた3つのテーマの発表を聴いてもらい、話し合える・考えるきっかけを作りにしてもらいたいとこのテーマにした。」

パネラー発表。

①森田パネラーが「高齢者サロン活動の実践事例から」と題して発表。

・発表内容は別添スライド資料参照

森コーディネーターがサロンに参加している人がいるかと会場に投げかける。

○つづらがわサロンの参加者…高齢者にはお弁当と一緒に手作りの小物をプレゼントすることもある。メンバーで年間計画を作ることもありそれぞれが生き活きと意気込みがあり活気がある。

○森田パネラー…リーダー、また部門の代表者には目に見えない苦労があり特に金銭管理等は大変である。また今回のフェスティバルの集客にも一役買ってくれたことなどでメンバー間の連携、結束がうかがえる。活動内容では徐々に自発的にできるようになっているのでその成長が嬉しくたのしい。

森コーディネーターが、「サロンは自分達だけで立ち上げることは困難であり、社協が立ち上げに支援することは重要である。しかし、いずれは自主運営していくもので、自分達でできることをする。また各サロンにはルールもあり、長続きして負担のないようにするには程よいゆるさも必要ではないか。」と意見を述べる。

②村田パネラーが「地域子育て支援センターや、Happy Houseの実践事例から」と題して発表。

・発表内容は別添スライド資料参照

森コーディネーターが、子育てに変化を感じたかと質問。

○村田パネラー…イクメンという言葉もあるように最初は緊張したり肩に力が入っていた父親達が自然に子育てに参加するようになった。遊び場を提供すると運動をしたいというニーズに対して、バドミントンのサークルができて継続的な活動をしている。母親のなかには、手芸活動から作品販売ができるまでに拡充されてきている。また、うれしいこと悲しいことやピンチの場面での対応といった子育ての悩みなど、様々な話し合いができています。たとえ解決にならなくとも言葉に出せる、それを聴けるという場所ができています。

森コーディネーターが、ふたつの共通点として、「場所の提供が活動を生んでいる。生産性(物づくり)のあるものであれば、自発性を持ち意欲に繋がる。軽トラ市への出品などに発展し形となっていくのではないか。」と意見を述べる。

③大原パネラーが「まちおこしの実践事例から」と題して発表

・別添資料参照

・(会場舞台スクリーンの)映像は明治の終わりから大正始めの久万町商店街である。現在、久万町商店街は活気を失っている。こういう時代に戻りたいと思っている。自分の店は菓子問屋だが祖父の時代に創業され50年になる。自分は、店を継いでいきたい、潰したくないと思っている。自分達の活動は単なる『町おこし』ではない、『儲けたい』と考えている。商店街は商売人にとって生きがいであり、商人にとって『居場所』ではないだろうか。来客がいるからこそ商売は続けられるので、客が減ると商店も減る。久万町商店街減少の悪循環が起これば後継者不足となり、居場所が無くなってしまう。自分達は商店街の活性化を図りたいと考え、『蔵ライブ』『三輪車レース』『トン汁無料サービス』などの活動をした。ここで検討を重ねたのが、20代30代を呼び込むことである。若い人に来てもらうには、高齢者や子供を巻き込むことが必要であることに気づき、三世代交流を企画した。軽トラ市では回を重ねる毎に集客や賑わいが出ている。近隣の高齢者から『大原くんありがとう戦後こんな賑わいははじめてじゃ。』と感想をもらった。閉店したシャッターを開けてくれる人もあった。賑わいと共にコミュニティが生まれた。地域の皆さんは様々な趣味活動をして、同じことをやっている人は案外大勢いることにも気づいた。生産性はあっても店舗を持っていない方達に空き店舗を利用してもらう、また軽トラ市に参加してもらう、商店街が交流の場となれば居心地のいい縁側になりうるのではないかと思った。居場所をつくり、取り戻すということに気付いた。自分は『欲』は悪くないと思っている。欲を持ち活動をすることで活性化され居場所ができていくということに気付いた。

森コーディネーターが軽トラ市開催の経緯について質問。

○大原パネラー…軽トラ市の発祥は、2005年岩手県雫石町である。久万でも朝市をやりたいという声が商店街の婦人部、青年部から出て、片づけが早いという理由からぶっつけ本番で始まった。メンバーの変化(25人から20人に減る)はあるが、減った5人と縁が切れたということではなく、その後色々な場面で繋がり関わっている。

森コーディネーターが、「何かが始まる時、全員が関わる緩い強固な関わりというのがある。きっちりがっちりだけでは息苦しいものだ。活動は誰かがヘルプし、コアなメンバーでなくとも関係していく、ということで成り立ち、保たれていくのではないか。」と意見を述べ、会場に質疑応答を促す。

○グループホーム職員…ハッピーハウスでは高齢者との触れ合いを持つ機会があるか。

○村田パネラー…70歳くらいの方々と構成されるコーラスグループ『風』とのコラボがあり、今後はサロンやデイサービスに参加もしたいと思った。

○森コーディネーター…縁側の心地よさを子どもたちに伝えるとき、子どもを実際に縁側に連れていくというようなことではなく、ふれあっていくということでも十分だ。

○会場来場者…お金を儲けるということはエネルギーになるとわかった。ぬくもりがあれば高齢者はお金を使う。心からエネルギーが使える活気を帯びてくると思った。環境が整っていると子どもたちと触れ合う高齢者も元気になると感じた。また、地域で発祥したサロンは、サロン開催場所には歩いて行けるということが大切だと思った。

森コーディネーターが軽トラ市に纏わるエピソード紹介の投げかけをする。

○大原パネラー…軽トラ市に出店参加しているもののなかでネットワークが生まれた。同じような商売の方々がコミュニケーションをとり、より品質の高い物をつくりあげていった。同じものを売るのでから同じ軽トラになることもあり結果的に店舗数が減ったりと予想外のことがあり不利益に繋がる事態ともとれるが、仲間同志の結束とも思えた。相乗効果から新商品、新しい流れを生み出している。

その他、会場から様々な意見が出る。

○話のできる場所を残しておいて欲しい。

○知り合いの場所に小さなベンチがあり、話しをしてスッキリして帰れる、大きな井戸端会議のようなところがある。そこを失わないでいつまでも続けてほしいと願っている。そういう場所が久万に増えたらいいと思う。

○「共に生きるネットワーク」として横の繋がりが大事だと思う。

○個人情報のネットワークが必要だが個人情報保護の観点から難しいこともある。情報交換できると小さな町でも知らない人が大勢いることに気付く。ネットワークを築いていくことは大事だと思う。

○松山市から来たという参加者…カラー刷りのパンフレットが良かった、ひと目見て来たいと思った。軽トラ市も良かった、堪能した。会場に来たときの受付の職員の笑顔が良かった。トマトもおいしいし、満足だ。実は自分は、ボランティア関係者でネットワークも持っている。異職種交流会は今後も拡がりに貢献していけると思う。

二宮パネラーが、「情熱は人を動かす。最初は自分一人だけでも次第に輪が広がり拡充して行く。それは実現し継続する力になっていく。それを発展させるには皆の協力が大事だ。」と分科会を纏める。

森コーディネーターが「とにかくやってみることが大切だ。『温もりと安らぎのある住みやすい福祉のまち みんなでつくる久万高原』を気負いなく気軽にやってみることが重要だ。キーワードは、

『小さなベンチ』。そこから始まり、歩いていける距離からコミュニティは生まれる。小学校がそこにある意味は地域の単位として活動が広がっていけることである。立派でなくてよい、コア（中核的）なメンバーのみならず、緩やかな関係でサポート、場所づくりを行っていく。関係性は変化し成長していき、そこを利用している人達が主役となり緩い絆で螺旋状に伸びていく。人間は、自分も愛したい、他人も愛したい、そういう感情が、人を助けたり助けられたりする。そういう関係性は、話すことから始まる。この世に要らない人はいなし、皆必要とされている。情報交換を行い、無関心でなく、人を知るということが大切だ。今日ここに集った方々はパネラーに関心を持ち、発表に興味を持つことができた。後は二宮さんが全体会で広げてくれる。」と、二宮パネラーに報告会での宣言を託し終了を伝える。

6. 閉会

二宮パネラーが、これで第1分科会を終了する旨述べ、会場を産業文化会館へ移しての報告会への参加について呼びかけ、閉会宣言。